松下屋敷跡

（第２次調査）

現地説明会資料

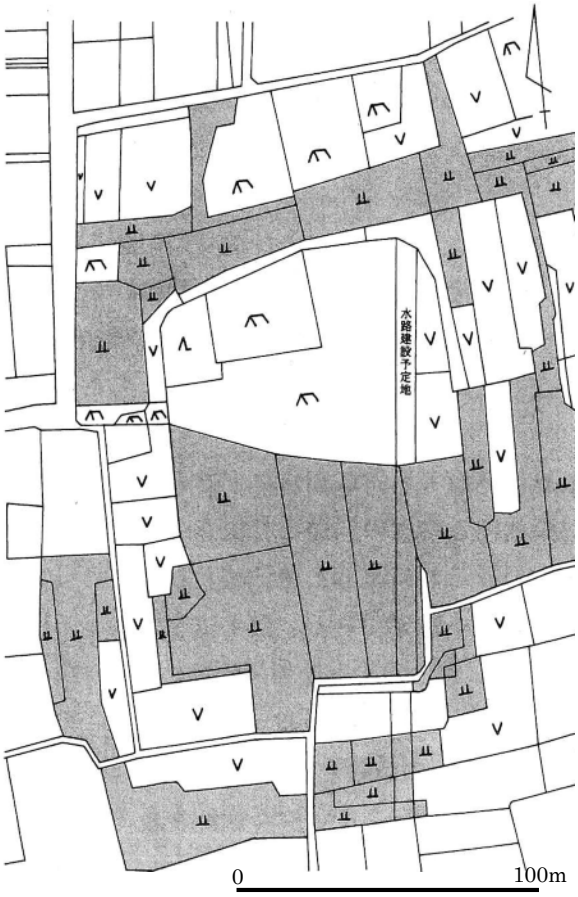
2015 年 9 月 12 日

浜松市文化財課

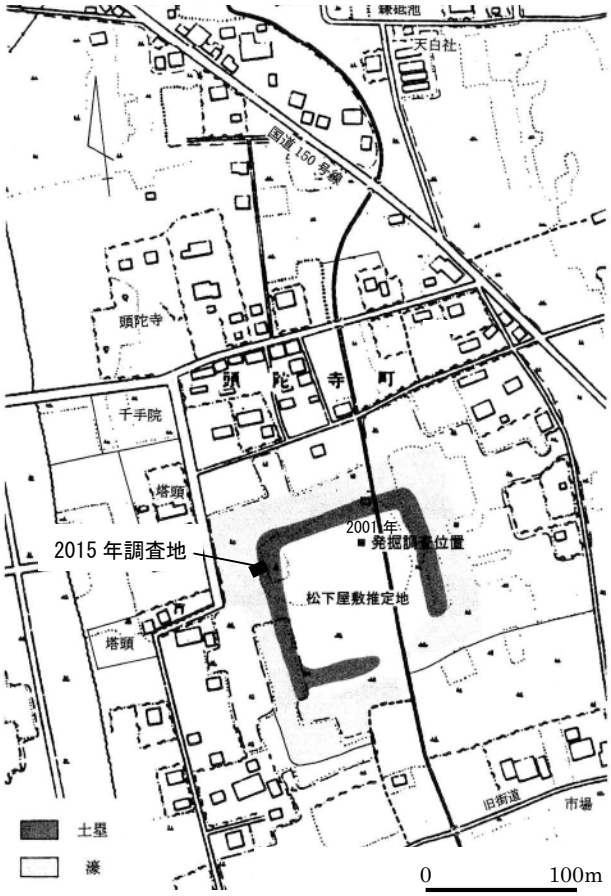
■松下屋敷について

松下屋敷は、戦国時代の武将、松下氏の館跡と伝わる場所で、「頭陀寺城」とも呼ばれる。屋敷の北側には８世紀初頭の創建と伝わる頭陀寺があり、中世にはこの地区にあった荘園、川匂荘（河輪地区・芳川地区～磐田市竜洋町）の経営にもかかわっていた。政治経済の中枢地に軍事勢力が拠点を設けたといえ、頭陀寺と松下屋敷の密接な関係がうかがえる。

松下屋敷とその周辺の様子は戦後に行われた区画整理により大きく変化しているが、地籍図や絵図を基に屋敷地の範囲や構造を復元することができる。屋敷地は 100m 四方ほどの大きさがあり、周囲は、濠と土塁に囲まれていた。



松下屋敷跡の地籍図



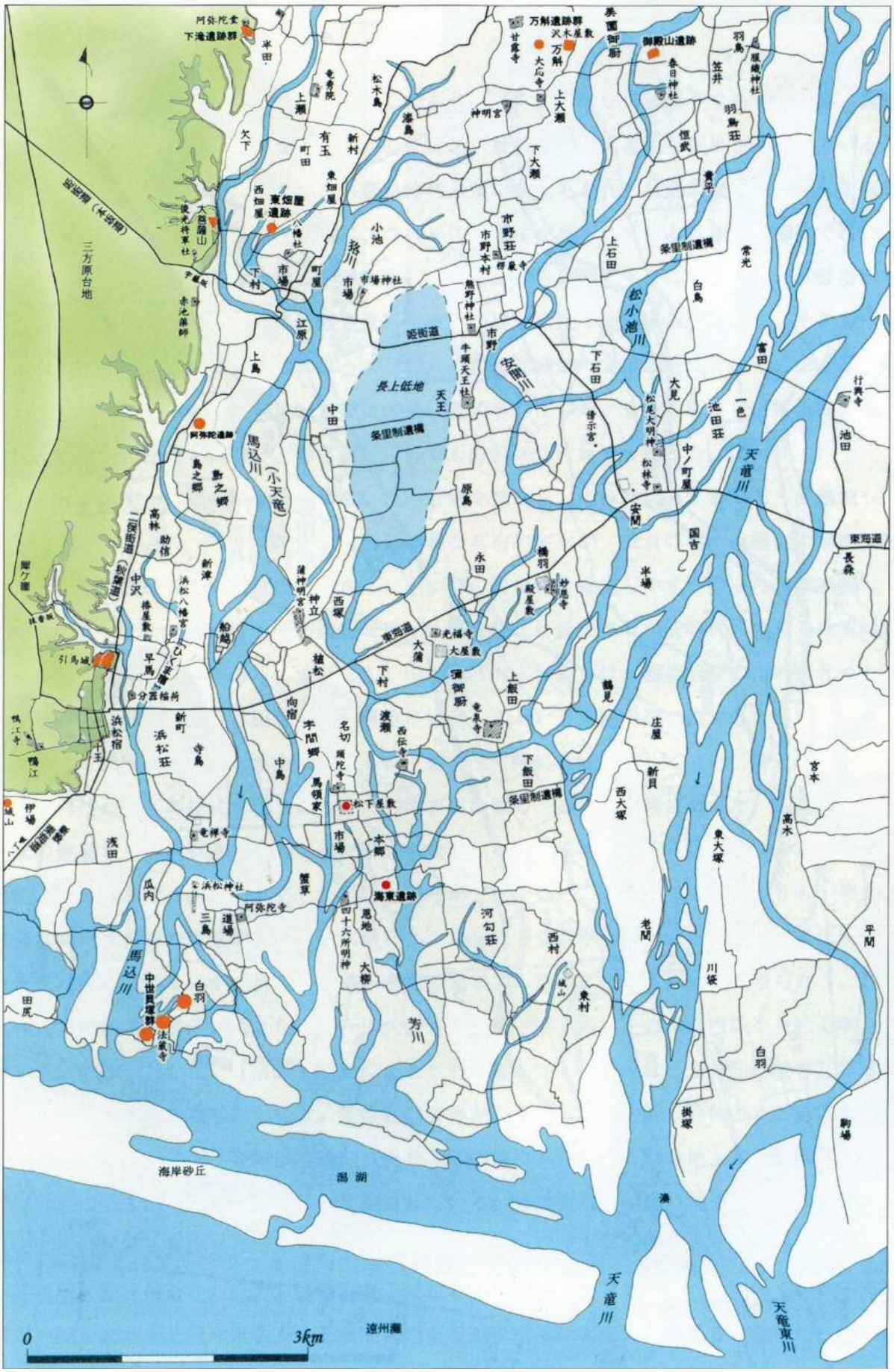
松下屋敷とその周辺

※松下氏について

松下氏は、今川氏、徳川氏、豊臣氏に仕えた戦国武将である。織田信長に仕える前の豊臣秀吉が松下家の当主、松下之綱に一時奉公したという伝承があり、周辺には秀吉が鎌を研いだと伝わる「鎌砥池」が知られている。徳川家康が遠江を領有した際に、松下之綱は家康の配下となり、秀吉が天下を治めた後には袋井市の久野城主に取り立てられた。

松下之綱の従兄弟・松下清景は幼き日の井伊直政（虎松）を養子に迎えている。当時の井伊家は男性の系譜が途絶える危機にあり、虎松の後見人であった女性地頭、井伊直虎（次郎法師）を中心に再興を期していた。天正３年（1575）、井伊直政は「松下虎松」として徳川家康にお目見えし、以後、出世の道を歩むことになる。松下清景は井伊家存続にかかわる影の功労者といえるだろう。

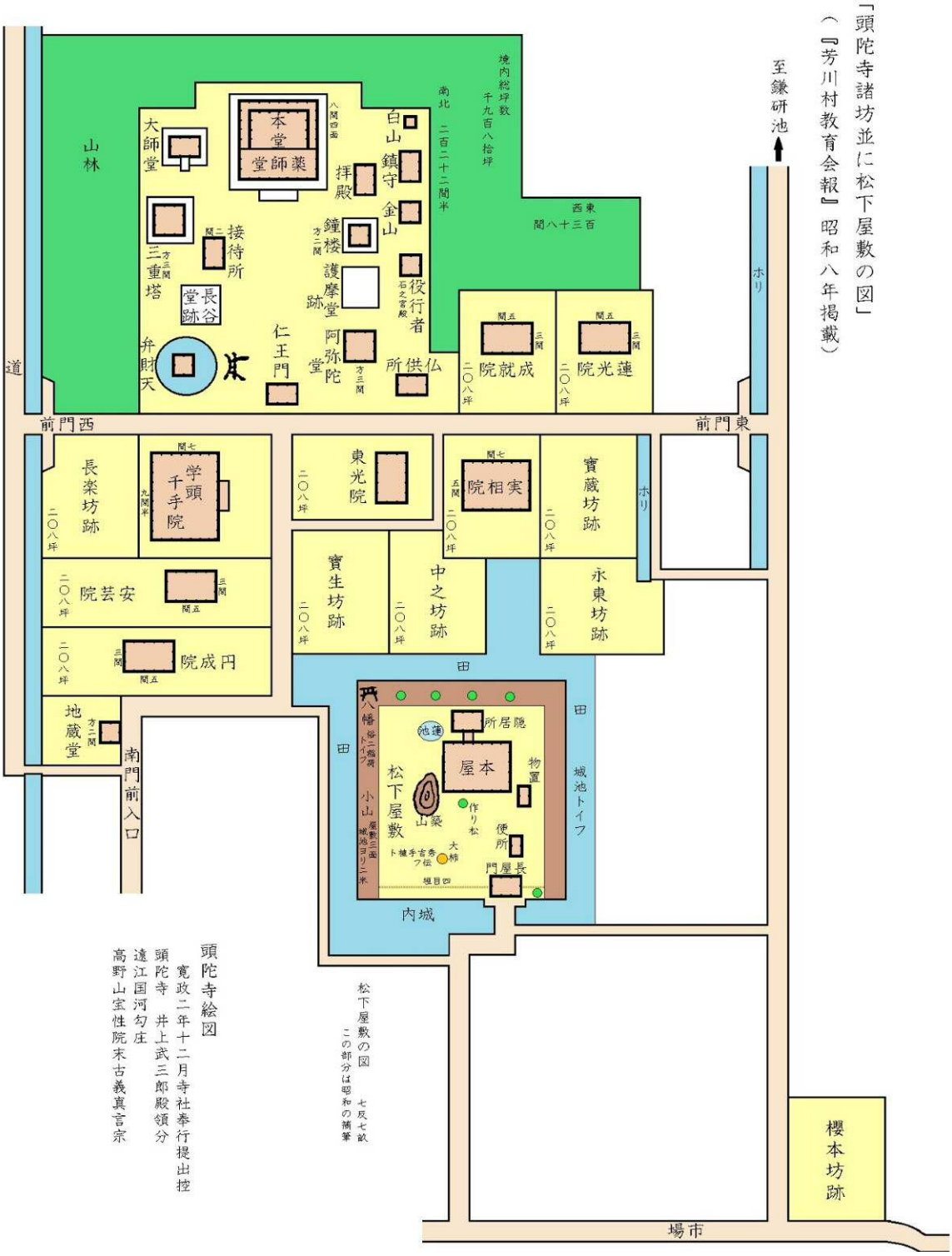
その後の松下氏は、登用や主人の移動に伴い浜松を離れる人物が多かったが、明治時代までこの地に居を構えたものもいた。



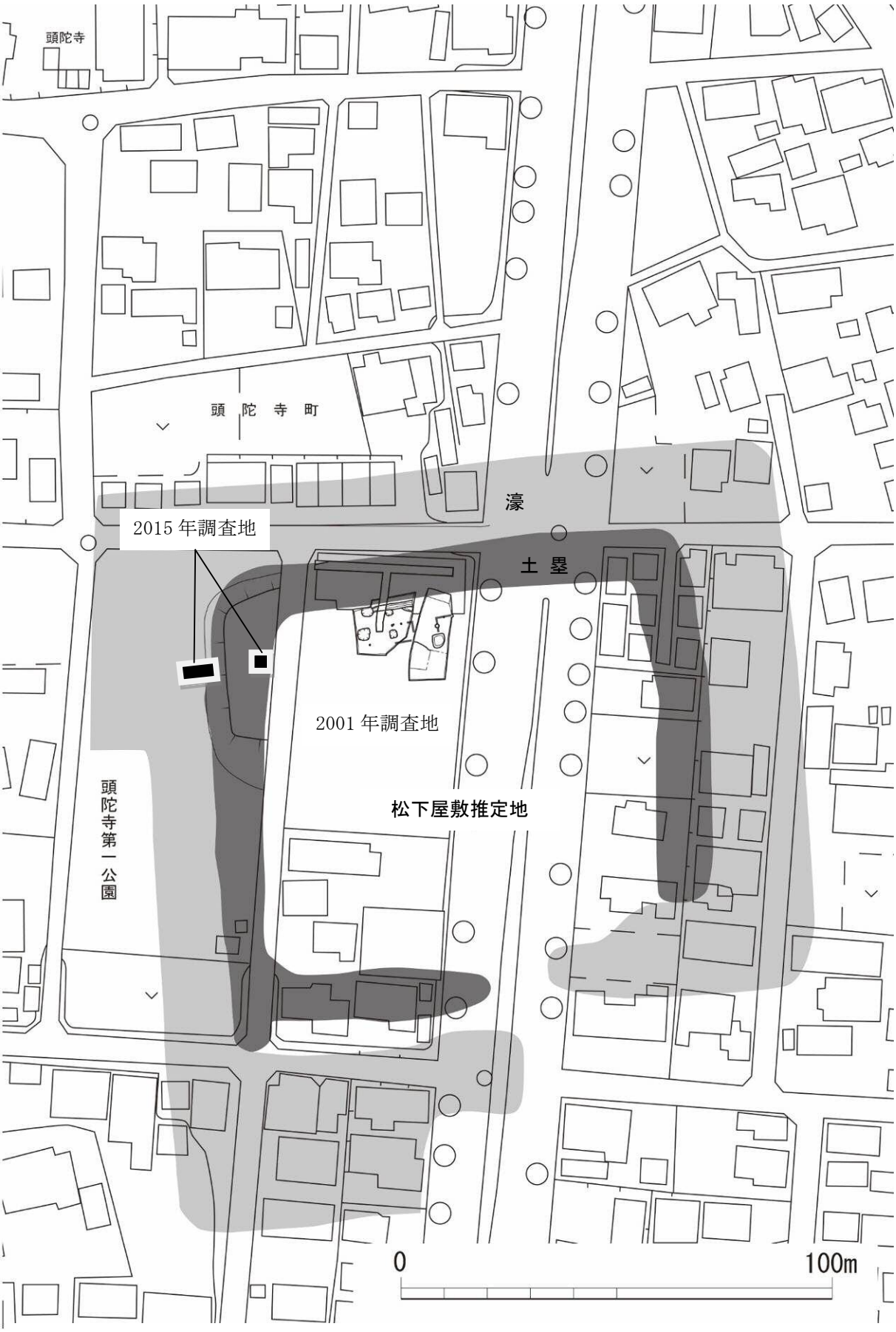
天竜川の主要な旧流路と交通路、松下屋敷跡の位置

頭陀寺（真言宗）は、大宝３年（703）開創と伝わる寺院である。開創の地は不明であるが、貞観５年（863）には「定額寺」の指定を受け、国分寺に準じた寺院として認められた。現在の地に頭陀寺が移転したのは、平安時代中頃の長保２年（1000）とされる。

１６世紀には、塔頭が立ち並ぶ一角に松下氏の居館（城）が整備された。現在も頭陀寺とその周辺には、当時の地割を残す部分がみられ、当時の景観が垣間見られる。



頭陀寺の構造と松下屋敷の位置

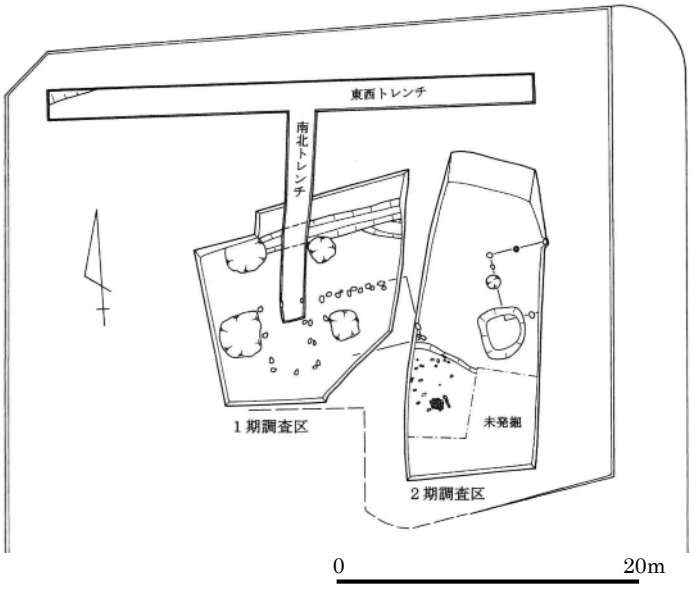


松下屋敷跡の調査成果

2001 年の発掘調査成果

2001 年、頭陀寺第一公園の東となり地点を浜松市が発掘調査し、詳細が不明であった松下屋敷の様子が明らかになった。

おもな調査成果として、①15 世紀の苑池状の遺構が確認され「かわらけ」が豊富に出土したこと、②16 世紀に焼失した礎石建物があること、③焼失した礎石建物の上を整地し礎石建物が再建されたことがあげられる。



2001 年の調査で検出された遺構

検出された礎石建物

礎石周辺の土は焼けており、永禄７年（1564）に頭陀寺城が焼失、再建したという記録との関連が注目される。

出土した貿易陶磁器　　出土した陶器

出土した「かわらけ」

苑池状の遺構をはじめとした遺構から、かわらけが豊富に出土し、かわらけを用いた儀礼が盛んに執り行われたことが想定できる。

浜松市文化財課　☎053-457-2466